はじめに

九州は、他国からわが国に新たな信仰・宗教がもたらされる際の窓口であった。博多には、空海が唐から帰国して最初に建立した真言宗寺院であると伝える東長寺が、また南宋から禅宗を伝えた栄西が創建し、「扶桑最初之禅窟」の扁額を掲げる聖福寺が現在もその威容を誇っている。中国から伝来した仏教の諸宗派は言うに及ばず、フランシスコ・ザビエルの来日に端を発したキリスト教の伝来も九州から始まった。中国の航海神である媽祖信仰のような、民間信仰までも伝わっている。

一方、日本固有の神々の世界とも結びついた山岳信仰は、九州各地に霊山を生んだ。大宰府の背後にそびえる宝満山は遣唐使が航海安全を祈った霊山であり、中世においても僧兵を擁して君臨した。国東半島においては半島の東部と西部で様相を異にするとはいえ、半島全体が「六郷山」という一つの寺院群を形作り、独自の宗教文化が育まれていた。全国的に展開した経塚造営においては、九州は早くから埋経が行われた地域であり、独自の経筒形式を生み出すとともに、博多周辺の中国人商人の間にまで広がるなど、九州独自の国際的な社会に順応したあり方を見せる。

九州各地に残る仏像においても独自性がある。都とは異なる特徴をもちながら、大陸の影響を受けた仏像が九州に認められるのは、豊前の宇佐八幡宮に始まる八幡信仰が大陸の文物や国内の古い図像の受け皿となって、新たな仏像を生み出す基盤になったとされている。宇佐宮・大隅正八幡などの八幡信仰の広がりは、九州の宗教文化を知る上では欠かせない要素となる。

信仰心の発露である石塔にも九州にしかないものがあり、大陸との密な交通は、列島の他地域にはない、中国系の石造物を生み出している。近年注目を集めている薩摩塔は、石材産地とともにその異様ともいえる独特の形態、刻まれ

た尊像の像容などから、中国寧波周辺との深いつながりが認められ、博多周辺・平戸周辺、薩摩半島周辺に著しく偏在している。首羅山遺跡のように中国との関わりをもつ山林寺院が営まれ、国東半島に独特な宝塔である国東塔が地域的な分布を示すのも、九州ならではのことである。さらに火山堆積物が豊かな九州では、やわらかな溶結凝灰岩を用いて装飾豊かな彫刻をこらし、木造建築物に見立てた石塔が肥後・薩摩など九州西岸を中心に広がっており、石塔文化の地域性は看過できないものがある。宗派・教義だけでは説明しきれない精神文化のありようがひそんでいるのかもしれない。

仏像や石塔の製作を担う職人たちが九州各地に根付いていたように、鋳物生産においても、北部九州にはいくつかの鋳物師組織があって梵鐘の製作に携わっていた。豊前・筑前・周防の鋳物師は琉球鐘の鋳造に関わるなど活動の場を広げているが、南九州に鋳物師組織がなく、搬入品の梵鐘でまかなっていたという。これもまた九州の北と南の個性として興味深い。

『九州の中世』シリーズでは、その締めくくりとして、中世九州の精神風土を取り上げた第Ⅳ巻を用意した。収録した論文は、石造物や仏像に及び、その論者の視点も歴史学・考古学にとどまらず、美術史にもわたっている。それぞれの論文の間には、一見すると関連性は見出しがたいかもしれない。しかし、そこに多様性を見出すことは可能であろう。その多様性こそが、中世九州の信仰世界が有した歴史的特徴と言えるのではなかろうか。

『九州の中世Ⅳ 神仏と祈りの情景』が、九州の精神世界を探る原点となり、今後の議論に一石を投じることができれば幸いである。

大庭 康時

島東部に多く、銘文から死者追善のために建てられたものとみられる。すると、鳴板碑などが所在する国東郷（豊後国衙領、現在の国東市国東町）では死者追善のための文殊信仰が一定度広がっていたことがわかる。もちろん、資料残存の偶然性もあろうが、文殊菩薩のみの種子を刻む板碑が国東半島でも古い時期に属する板碑に多くみられることは、やはり注目すべきことと考える。この文殊信仰と板碑に関しては、河野清實の研究［河野 一九三〇］がある。以下では河野の研究をふまえ、改めて文殊信仰と石造物について捉え直していきたい。

　これまでの諸研究によって、文殊菩薩への信仰には貧民救済や国家鎮護など多様なものがあったことが明らかにされている。ただし、上田純一によれば、この文殊会における文殊信仰の本質には『文殊師利般涅槃経』に基づく罪障消滅さらには治病延命もあり、中世になるとそうした文殊菩薩の滅罪性が強調され、この滅罪性に基づく文殊信仰は中世南都において色濃く残存したという［上田 一九八七］。

　時代によって変化はあるものの、文殊信仰には基本的に罪障消滅があり、鳴板碑などにみられる死者追善はそうした文殊信仰の発露といえる。また、中世の南都においては阿弥陀信仰を背景とした文殊信仰も所在したという［谷口 二〇〇六］。こうした点をふまえると、亡父の菩提を弔うために文殊菩薩を仰いだ鳴板碑は、中世の南都における文殊

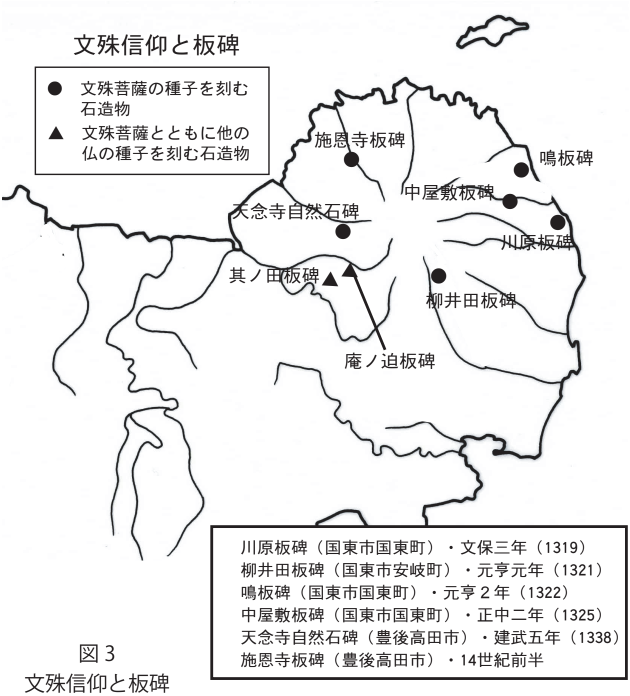

図３
文殊信仰と板碑

図２　四天王像　大分・真木大堂
右下から時計回りに持国天・増長天・広目天・多聞天